

高校生の友人関係と SNS 利用に伴うネガティブ経験

中山 満子 (奈良女子大学 文学部, michiko@cc.nara-wu.ac.jp)

A study on the relationship between friendship style and negative experience with SNS in Japanese high school students

Michiko Nakayama (Faculty of Letters, Nara Women's University, Japan)

要約

本研究では、高校生の友人関係とSNS利用に伴うネガティブ経験（以下、SNSネガティブ経験）との関連を検討した。近年の日本の高校生の友人関係にはいくつかの類型があると言われる。本研究では、高校一年生（175名）を対象として質問紙調査を実施し、高校生の友人関係を類型化したうえで、友人関係がSNSネガティブ経験の程度にどのような影響を持つのかを検討した。また、SNSネガティブ経験は利用しているSNSに影響されることも想定されるので、本研究では、LINE、Twitter、Instagramの3種類のSNSに着目して、友人関係の類型とSNS利用パターン及びSNSネガティブ経験との関連について分析した。友人関係の類型としては先行研究と類似の関係回避群、気づかい・群れ群、内面関係群の3群を得た。SNSネガティブ経験のうち閲覧強迫、情報拡散不安、社会的比較は、内面関係群に比べて気づかい・群れ群で多いことが示された。また友人関係類型とSNS利用パターンの分析から、内面関係群では複数のSNSを並行利用する傾向にあり、LINE利用時間は3群中もっとも長いこと、関係回避群は他のSNSを利用せずLINEのみを利用する者が多いことが示された。これらの結果から、SNS利用の多寡それ自体よりも友人関係のあり方がSNSネガティブ経験に影響することが示唆され、先行研究で示されている友人関係類型と心理的適応との議論を踏まえて考察された。

キーワード

SNS, インターネット, ネガティブ経験, 友人関係, 高校生

1. はじめに

スマートフォン（以下、スマホ）の爆発的普及に伴い、いつでもどこでもインターネットにアクセスできるようになった。スマホの特徴は多重的な機能と利便性にあり、使い道は個人・世代によって大きく異なるが、10代、20代の若者のスマホからのインターネット利用時間はここ数年間でも増加傾向にあり、特に10代ではSNS（Social Networking Service）利用時間が長いことが報告されている（総務省，2017）。また若年層を対象にして内閣府（2017）が行った調査によれば、中学生のスマホ利用率が60%弱であるのに対して、高校生では95%をこえ、高校生にとってスマホは必須のコミュニケーションツールとなっている。この内閣府の調査では、高校生のインターネット利用者のうちほぼ9割がインターネットで「コミュニケーション」していると回答している。「コミュニケーション」には、ソーシャルメディア、メッセージング、メールが含まれており、総務省の調査とあわせてみると、高校生がスマホを介して行うコミュニケーションの多くがSNS上で行われると考えられる。

SNSの定義は明確に定まっているわけではないが、本論文では河井（2012）に従い、「既存の社会的つながりの維持や新たな社会的つながりの構築を支えるためのオンラインサービス」と広く捉えることとする。今日の日本では、LINE、Twitter、Instagram、Facebookなどがこれに該当する。1990年代後半から2000年代初頭には、携帯電話（フィーチャーホン）が若者に浸透し、その使用が友人関係に影響を及ぼすという議論が行われた。携帯メールとSNSには様々な相違点があるが、

ここでは二つの点に注目し、SNSの特徴がネガティブ経験に通じることを論じる。一点目は、メールに比べてSNSの方が“新たなつながり”を生む可能性が高いということ、二点目はSNSには多様な“可視化”の機能が組み込まれているということである。

新たなつながりの生成については、橋渡し型社会関係資本の醸成（宮田，2005）などポジティブな側面も指摘されるが、中尾（2017）が高校生のインタビューデータから報告しているように、見ず知らずの人からのコメントや友達申請、あるいは商業的な勧誘などに不安や苛立ちを感じるなどのネガティブな影響もあると考えられる。また、新たなつながりを生み出せなかった者にとっては、そのこと自体がネガティブ経験になりうる。これは、二点目の可視化機能とも連動している。すなわちSNSでは、誰と誰がつながっているのかといったつながりの様相、SNSでのつながり（友人数）の多寡、あるいは新規につながりが生まれているかといったことも見えてしまい、そのことが社会的比較やネガティブ感情を生じさせるのである。このようなつながりの可視化に加えて、やりとりが一覧表示され履歴が残ることによるコミュニケーション自体の可視化、さらには「いいね！」の数に象徴されるような他者からの評価の可視化もSNSの特徴である。テキストだけでなく写真や動画を投稿、共有できることもコミュニケーションの可視化、評価の可視化を補強している。そして、このような多様なSNSの特徴が、若者の間でいわゆる「SNS疲れ」（加藤，2013；二宮他，2016；中尾，2017）や「SNSストレス」（岡本，2017）といわれるネガティブ経験を生み出していると考えられる。

このように、SNS自体の特徴や、そこに組み込まれた機能がSNS利用に伴うネガティブ経験の要因となるが、若者も

つ友人関係の特徴もまた、それらの要因になると考えられる。青年期における友人関係については、これまでに多くの研究が行われてきている。大学生を対象とした研究が多いが、いくつかの研究では大学生と高校生の違いが指摘されている。例えば、落合・佐藤(1996)では、高校生の友人関係には明らかな特徴が見出されていないが、大学生になると選択的で深いつきあひ方が増えることを示している。また高坂(2010)は、大学生になると他者から異質視されることへの不安が相対的に減少することを示している。一方、榎本(1999)は、高校生(特に女子)が排他的な一定単位の仲間集団を形成し、友人関係が閉鎖的であると述べている。

また現代青年の友人関係の特徴として、しばしば希薄化の傾向が指摘されてきた。希薄化とは、友人と深くつきあうことを避け、表面的で快適な関係を築こうとする傾向である。一方で、現代の若者の姿を見ると、携帯やスマホなどのメディアを手放せず、常に友人とつながっていたいという緊密化の様相もみられる。この点については、多くの研究が、今日の若者が相手に気をつかいながら、深入りすることなく、お互いに心地よい関係を志向するということを指摘している。岡田(1995; 2005; 2007; 2011)は一連の研究で、大学生と高校生を含む現代青年の友人関係について、自己閉鎖、傷つけられることの回避、傷つけることの回避、快活の関係という4つの傾向を測り、類型化している。すなわち、自他が傷つくことを避けつつ円滑な関係を志向する群、友人関係から回避し自分にこもる傾向を有する群、そして内面的友人関係を志向する群の3群を見出し、前の二つを現代青年に特有の友人関係とした。

これらの議論を踏まえると、若者の中でも高校生は、大学生ほど友人関係が選択的ではなく、異質視されることへの不安や閉鎖的な仲間関係から外れることへの不安を抱えており、その中で互いに気をつかいながら快適な関係を築こうとする特徴を有すると考えられる。そして、そのような関係のあり方と「つながりの維持・構築を支える」道具であるSNS利用の間には密接な関係があると予想される。そこで本研究では、若者の中でも特に高校生を対象として、友人関係とSNS利用について検討する。

現代的な友人関係とメールやSNSの利用については、これまでにいくつかの研究がなされてきている。赤坂・坂元(2008)は携帯電話の使用と友人関係の関係を調べ、高校生では虚構の一体感や情緒的依存が高いほど、友人との密着性(嫌われないように相手にあわせてつきあう傾向)が高まるという結果を得ている。これは、メールを介して本心を隠して取り繕うようなやり取りを行い、それがないと情緒的な欠乏を感じ、嫌われないように相手にあわせて、いつも一緒にいるという現代的な高校生の姿を示していると解釈された。また時岡他(2017)は、岡田(2007; 2011)の研究を踏まえて高校生の友人関係とLINEへの認知の関係を検討している。そして傷つけられることの回避が、LINEによるつながり感といったポジティブな側面にも、即時返信へのとらわれ、既読無視への不安などのネガティブな側面にも影響していることを示した。時岡らは、友人関係のとり方からLINEへの認知の方向での影響を検討しているが、議論においては、LINE認知の因子ごとに、

友人関係のどの因子からの影響があるかという観点の分析にとどまっており、どのような友人関係のとり方がLINE利用や利用によるトラブルや心理的負担につながるのかといった考察はあまりなされていない。

さらにSNSが新たなつながりを生む装置であることから、SNS利用によるネガティブ経験には、携帯メールで体験されたような既存の友人関係におけるトラブルにとどまらず、より幅広い問題やリスクが含まれている点にも着目する必要がある。前述の中尾(2017)では、見知らぬ者の接近や商業的勧誘などの高校生のネガティブ経験が語られており、大学生はSNSが自他に及ぼす影響や危険度について認識して利用しているのに対して、高校生はそのような認識が希薄である可能性が指摘されている。そこで本研究では、SNS利用から生じる多様なネガティブ経験を検討の対象とする。

以上から本研究の目的は、高校生の友人関係を岡田にならって類型化し、そのうえでSNS利用に伴うネガティブ感情やネガティブ経験との関連を検討することである。

2. 調査方法

2.1 対象者と実施方法

近畿圏の公立A高等学校の1年生を対象に、授業時間内において集団で調査を実施した。本論文で報告するデータは、高校生のSNS利用と友人関係について調べるために、平成29年11月中旬と約1か月後の12月中旬に、個人を対応づけて2回にわたって行った調査データの一部である。調査は、SNS利用実態や利用動機、友人関係、ソーシャルサポートなど多岐にわたる項目からなっていたが、ここでは、1時点目で尋ねたSNS利用状況と友人関係のあり方、および2時点目で尋ねた直近1か月間のSNS利用時間とSNS利用に伴うネガティブ経験について分析する。調査にあたっては、授業時間中に教科担当教諭が調査の目的、2回の調査を対応づけるために出席番号を記入すること、回答は任意であることを教示し、一斉に実施し、その場で回収した。

1時点目225名(男子65名、女子160名)、2時点目227名(男子65名、女子162名)のデータを得た。本論文では、1時点目と2時点目のデータの対応が合った者のうち、回答に不備がある者、および9割以上の設問に同じ回答をしている者を除き、175名(男子41名、女子134名)を分析対象とした。なおA高等学校は、全体に男子よりも女子の生徒数の多い高校であり、このために本データにおいても女子の割合が高くなった。

2.2 質問項目

2.2.1 友人関係のあり方

友人関係尺度(岡田, 2007)を用いた。自己閉鎖(例: 本当の気持ちは話さない)、傷つけられることの回避(例: 友だちからどう見られているか気にする)、傷つけることの回避(例: 相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける)、快活の関係(例: 冗談を言って相手を笑わせる)を想定した42項目に「全くあてはまらない(1)」～「よくあてはまる(5)」の5件法での回答を求めた。

2.2.2 SNS 利用に伴うネガティブ経験

SNS利用に伴うネガティブ経験の測定には、SNS利用に関連した広範囲なネガティブ感情やネガティブ経験を対象としているSNSストレス尺度(岡本, 2017)を用いた。閲覧強迫(例:定期的に見ていないと大事な情報を見落とすのではないかと不安になる)、情報拡散不安(例:一度投稿すると、情報がどこまで広がるかわからず不安である)、友だち申請の拒絶(例:面識のない人から友達申請されると、いやな気持ちになる)、社会的比較(例:楽しそうな投稿を見ると嫉妬してしまう)、過剰なつながり(例:常にSNSで人とつながっている気がして疲れる)、SNSと現実のギャップ(例:実際に会ったときとSNSでの態度のギャップに戸惑うことがある)、背伸び(例:何か良いことを投稿しなければと、無理に背伸びをしてしまう)の7因子を想定した26項目に、「全くあてはまらない(1)」～「よくあてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。なお岡本は、「SNSを利用しているときに、嫌だ、不愉快だ、煩わしいと感じること」について予備研究で収集して尺度を作成し、これにより「SNSストレス」を測定するとしている。しかし、この尺度で測る概念とストレス理論との関係は明確にされていないため、本研究では「ストレス」という用語は使用せず、種々のネガティブ感情の生起も含めてネガティブ経験(以下、SNSネガティブ経験)と呼ぶことにする。

2.2.3 SNS 利用状況

SNS利用については、1時点目にLINEトーク機能(以下、LINEと表記)、Twitter、Instagramの利用の有無、2時点目に、直近1か月間のSNS利用時間を尋ねた。利用時間は一日の平均利用時間を平日・休日別に記入することを求めた。

3. 結果

分析は、SPSS24.0を用いて行った。友人関係についての研究では性差がみられるという知見も多いが、本研究では人数に偏りがあり男子のデータが少ないことから、一括して分析することとする。

3.1 友人関係

友人関係尺度については、岡田(2007)の結果にあわせて検討した。該当する項目を選定し、Cronbachの α 係数によって信頼性を確認して信頼性を下げる項目を除外したうえで、素点の加算平均を得点とした。最終的に採用した項目は、自己閉鎖16項目($\alpha = .746$)、傷つけられることの回避7項目($\alpha = .803$)、傷つけることの回避8項目($\alpha = .833$)、快活的関係6項目($\alpha = .860$)であった。項目一覧は付録に示す。

次に各下位尺度得点をもとにクラスター分析(Ward法)を行った。その結果、解釈可能な3クラスターを得た。得点を標準化したうえで、クラスターごとの平均値を求めたものを図1に示す。これらは、おおむね岡田(2007; 2011)が示す3クラスターに対応しているため、これにならって議論していく。

クラスター1は、自己閉鎖のみが正の得点であり、他のクラスターよりも高く、また快活的関係は最低で標準得点は負の値をとっている。岡田(2011)でも類似のクラスターが得られており、関係回避群と命名されているので、本論文でもこ

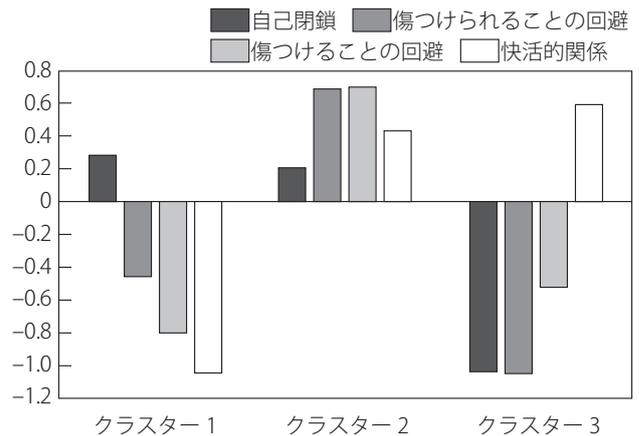


図1：友人関係の類型

れにならない関係回避群とする。岡田(2007)によれば、このような友人関係を回避し、自分にこもる傾向は、現代的な友人関係のひとつの型であると言われる。

クラスター2は、すべての得点が正であるが特に傷つけられることの回避、傷つけることの回避得点が高い。また快活的関係得点も比較的高い。自他ともに傷つけられることを回避しながら、円滑な関係を築こうとする群で、岡田(2011)において、気づかい・群れ群と命名された現代青年に特有な友人関係と考えられる。

クラスター3は快活的関係のみが正であり、自己閉鎖、傷つけられることの回避ともに低い。岡田(2007)によれば、この群は内面的な友人関係を志向する従来型の青年観に一致する特徴を有する。岡田(2011)にならぬ内面関係群と命名する。

3.2 SNS 利用

SNS利用状況としては、175名中LINEは167名(95.4%)、Twitterは142名(81.1%)、Instagramは96名(54.9%)が利用していた。いずれのSNSも利用していない2名を以降の分析から除外した。この2名は、上記の友人関係の類型では、1名が気づかい・群れ群、1名が内面関係群であった。

LINE、Twitter、Instagramそれぞれの直近1か月でのSNS利用時間(平日と休日の一日あたりの利用時間の平均)を求めた。LINEが1.9時間($SD = 2.4$)、Twitterは2.3時間($SD = 2.5$)、Instagramが1.1時間($SD = 2.1$)であった。利用時間については自由記述での回答を求めたが、いずれのSNSでも最大値は1日あたり15時間と回答されており、やや回答の精度に疑念がある上に欠損値も見られたが、ここでは参考までに分析に加える。

3.3 SNS ネガティブ経験

SNSネガティブ経験は、岡本(2017)の研究2に示されたSNSストレス尺度に基づいて得点化した。閲覧強迫5項目($\alpha = .824$)、情報拡散不安5項目($\alpha = .880$)、友だち申請の拒絶3項目($\alpha = .826$)、社会的比較3項目($\alpha = .835$)、過剰なつながり3項目($\alpha = .787$)、SNSと現実とのギャップ4項目($\alpha = .863$)、背伸び3項目($\alpha = .853$)であった。

3.4 友人関係の種類と SNS 利用

友人関係の種類別の SNS ネガティブ経験および LINE 利用時間の平均値を表 1 に示す。友人関係と SNS ネガティブ経験の関連を検討するために、3 つのクラスターを独立変数、SNS ネガティブ経験を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、閲覧強迫、情報拡散不安、および社会的比較においてクラスターの効果が有意であり、いずれも気づかい・群れ群が内面関係群に比べて SNS ネガティブ経験の値が高いことが示された。また、SNS ネガティブ経験の総得点においても、気づかい・群れ群が高いことが示され、傷つけられること、傷つけることを回避し、円滑な友人関係を志向する高校生が、SNS 利用に伴うネガティブ経験が多い傾向があることが明らかにされた。

また、利用率の高い LINE の利用時間を比較したところ、内面関係群で他の群よりも利用時間が長いことが示された。

次に友人関係の種類によって、SNS の利用パターンが異なるかどうかを検討するために、LINE、Twitter、Instagram 利用の有無で利用者を分類した。その結果、3 つともすべて利用している者（以下、全部利用）が 87 名、LINE と Twitter 利用 50 名、LINE のみ利用 25 名、Twitter のみ利用 2 名、Instagram のみ利用 2 名、LINE と Instagram 利用が 5 名、Twitter と Instagram 利用が 3 名であった。そこで、ここでは人数の多かった LINE のみ利用、LINE と Twitter 利用、全部利用の 3 群（計 162 名）をとりあげ、利用の有無と友人関係の種類をクロス集計した（表 2）。内面関係群で LINE のみ利用している者は 1 名であり、期待度数が 5 以下となったが、参考までに χ^2 検定を行った結果を示す。検定の結果、 $\chi^2(4) = 11.37, p < .05$ となり、友人関係の種類と SNS 利用パターンの間には連関があることが示さ

れた。調整済み残差を求めて残差分析を行ったところ、内面関係群では、LINE のみ利用が少なく全部利用が多いこと、また関係回避群では LINE のみ利用が多いことが示された。

4. 考察

本研究では、SNS 利用によって生起するネガティブ経験・ネガティブ感情と高校生の友人関係との関連について検討した。調査の結果、友人関係は先行研究で示された類型と類似した 3 群（関係回避群、気づかい・群れ群、内面関係群）が得られた。SNS ネガティブ経験との関連では、気づかい・群れ群で一般的にネガティブ経験が多く、内面関係群に比べて、閲覧強迫、情報拡散不安、社会的比較が有意に高いことが示された。また、長時間、多様な SNS を利用する傾向があるのは内面関係群であること、関係回避群では LINE のみを利用する割合が高いことも示された。

友人関係のとり方と心理的適応の諸側面との関連は、既に研究されている（岡田, 2007; 2011 など）。本調査では、適応や自尊感情については尋ねていないが、先行研究を参照しながら、友人関係のとり方と青年の心のあり方、および SNS 利用とそれに伴うネガティブ経験について考察する（以下、友人関係と心理的適応についての議論は、他の引用がない限りすべて岡田(2007; 2011)による）。

SNS 利用との関係で、もっとも特徴的であったのは気づかい・群れ群であった。自他が傷つくことを避けようとするこの群は、自己愛傾向が強いことが示されている。また自己愛傾向が強い若者は他者との比較を通じて自己肯定感を得ようとする、また友人から肯定的評価を得たいと望む傾向があるとされる（小塩, 2004）。この議論を踏まえると、この

表 1：友人関係の種類と SNS ネガティブ経験、LINE 利用時間

	1. 関係回避群 (n = 55)	2. 気づかい・群れ群 (n = 86)	3. 内面関係群 (n = 32)	F	
SNS ネガティブ経験					
総得点	57.71	63.43	54.38	3.17 *	3 < 2
閲覧強迫	2.04	2.26	1.88	3.43 *	3 < 2
情報拡散不安	2.20	2.54	2.06	4.00 *	3 < 2
友だち申請	2.16	2.22	2.00	n.s.	
社会的比較	1.92	2.16	1.73	3.21 *	3 < 2
過剰なつながり	2.07	2.16	1.83	n.s.	
ギャップ	2.15	2.41	2.34	n.s.	
背伸び	1.79	1.85	1.52	n.s.	
LINE 利用時間	1.69	1.72	2.91	3.50 *	1, 2 < 3

注：「ギャップ」は「SNS と現実のギャップ」、* $p < .05$ 。

表 2：友人関係の種類と SNS 利用パターン（人数）

	関係回避群	気づかい・群れ群	内面関係群	計
LINE のみ	12	12	1	25
LINE と Twitter	16	28	6	50
全部利用	22	41	24	87
計	50	81	31	162

群でSNSネガティブ経験が多いことが説明できる。本研究では気づかい・群れ群では、SNSネガティブ経験の中でも閲覧強迫の得点が高いことが示された。閲覧強迫とは、「定期的に見ていないと大事な情報を見落とすのではないかと不安になる」「友だちからのコメントに返信しないと、他のことに集中できない」などの項目からなる。見落として困る情報とは、おそらく友人関係にまつわる情報であり、コメントへの返信圧力は、かつて携帯メールで見られたものと類似している。この群は、SNSを常にチェックして友人に関する情報を得て、それに適切に対応することで、自他を傷つけることを避け、友人と良好な関係を維持していると考えられる。また情報拡散不安とは、「一度投稿すると、情報がどこまで広がるかわからず不安である」「一度投稿すると、完全には消すことが出来ないで不安である」などの項目からなり、SNS利用の中でも特に自分の投稿の影響に対する不安の高さを示している。これはすなわち、自分の投稿への他者の評価に対する不安や他者を傷つけてしまう可能性への不安が反映されていると考えられる。さらに社会的比較からくる嫉妬やいらだちは、前述の小塩(2004)の議論にもあるように、この群の特徴とも言える。

次に内面関係群は、いわゆる従来型の友人関係であり、全体的に適応的な特徴が見られるとされる。「自己閉鎖」「傷つけられることの回避」が低く、友人に対する警戒感が低く、友人から受容されていると考えており、結果として自尊感情が高い傾向があるといわれる。本研究では、この群の青年たちが、Instagramを含む複数のSNSを組み合わせて利用しており、LINEの利用時間も長く、その一方で、SNSネガティブ経験は全般的に少ないことを見出した。すなわち、友人関係が良好で適応的である場合には、SNS利用の多寡は必ずしもネガティブ経験に結びつかないことが示された。

最後に関係回避群は3クラスター中、自己閉鎖得点は最も高く、快活的關係が唯一負の値である。友人と本音で話すことをせず、希薄な関係にとどまろうとする一群と考えられる。このような関係をもつ青年は、自尊感情が低く、それは「傷つけることの回避」が他の群に比べて低い、すなわち他者の傷つけることを回避する配慮をしないために他者からの受容が得られず、そのことによって結果的に自尊感情が損なわれていると考えられている。本研究においても、関係回避群における「傷つけることの回避」は3群でもっとも低く、先行研究と同様の心理的特徴を有していると推測される。SNSネガティブ経験については、内面関係群と有意差がなく、特に高いという結果は得られていない。利用に関しては、LINEのみを利用する者の割合が高く、LINEの平均利用時間も長くないことから、あまりアクティブに利用していないのではないかと推察される。この群は友人との親密な関係自体を回避する傾向があることから、友人関係の構築・維持のツールとしてのSNS利用は低調であり、結果としてネガティブ経験もあまり生起しない、もしくは負担を感じてまで利用しようとはしないのではないかと考えられる。

5. 結言

本研究では、高校生の友人関係のとり方がSNSネガティブ

経験につながることを、友人関係についての先行研究を踏まえつつ論議した。友人と心を打ち明けてつきあう関係においてはSNS利用がネガティブ経験につながらないこと、傷つけあうことを回避しようとする傾向が強い場合に、SNSネガティブ経験が増大することが示唆された。高校生などの若年青年層においてはSNS利用の多寡のみに着目するのではなく、友人関係のとり方や心理的適応に注意すべきであると考えられる。

最後に本研究の限界と課題について述べる。データ収集は一つの高校でのみ行われたものであるため、一般化するためにはより多くの高校で調査することが必要である。男女の比率が偏っており、性差の検討ができなかったことも課題である。また、SNSネガティブ経験の指標として用いたSNSストレス尺度は大学生を対象とした研究で作成されたものであり、高校生にとって問題となるネガティブ経験やネガティブ感情をとらえきれているとはいえない。たとえば今日の喫緊の課題ともいえる「ネットいじめ」につながるようなネガティブ経験が十分に検討されているとは言えない。一方で、SNS利用によるネガティブ経験が問題となるのは、大学生や成人よりも、対人関係の範囲が限定的な中高生であると思われる。従って中高生を主たる対象と位置づけたいうでSNSネガティブ経験を測定する尺度を再考する必要があると考える。さらに、本研究では自己愛や自尊感情などは直接測定せず、先行研究に基づいての議論にとどまった。今後は、SNS利用実態をより詳細にとらえ、友人関係がSNSネガティブ経験に及ぼす影響だけでなく、SNS利用やSNSネガティブ経験が友人関係および心理的適応に及ぼす影響についても検討する必要がある。

謝辞

本研究は、科研費(基盤研究(C)15K04028、代表者中山満子)の助成を受けた。データ収集は、筆者の指導のもと2017年度奈良女子大学文学部雪野真菜さんの卒業研究として行われた。本論文は卒業論文で使用されたデータを全面的に分析しなおし、構成したものである。

引用文献

- 赤坂瑠以・坂元章(2008). 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響—パネル調査による因果関係の推定: パネル調査による因果関係の推定—. パーソナリティ研究, Vol. 16, 363-377.
- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, Vol. 47, 180-190.
- 加藤千枝(2013). 「SNS疲れ」に繋がるネガティブ経験の実態—高校生15名への面接結果に基づいて—. 社会情報学, Vol. 2, 31-43.
- 河井大介(2012). SNS依存者の生活習慣的影響と利用機能の分析—2010年A社SNS調査結果より—. 社会情報学研究, Vol. 16, 157-170.
- 高坂康雅(2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連—. 教育心理学研究, Vol. 58, 338-347.

内閣府 (2017). 青少年のインターネット利用環境実態調査. http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/net-jittai_list.html.

中尾陽子 (2017). 「SNS疲れ」につながるネガティブ経験の実態—大学生への面接結果および高校生の実態との比較検討から—. 人間関係研究 (南山大学人間関係研究センター紀要), Vol. 16, 53-68.

二宮麗・黒木ゆうか・中山満子 (2016). SNS利用に伴うネガティブ経験とSNS疲れの検討—インタビューと質問紙調査による検討—. 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. 115, No. 418, 73-78.

宮田加久子 (2005). きずなをつなぐメディア—ネット時代の社会関係資本—. NTT出版.

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあひの発達的变化. 教育心理学研究, Vol. 44, 55-65.

岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究, Vol. 43, 354-363.

岡田努 (2005). 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究. 金沢大学文学部論集行動科学・哲学篇, Vol. 25, 15-32.

岡田努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について. パーソナリティ研究, Vol. 15, 135-148.

岡田努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について. パーソナリティ研究, Vol. 20, 11-20.

岡本卓也 (2017). SNSストレス尺度の作成とSNS利用動機の違いによるSNSストレス. 信州大学人文科学論集, Vol. 4, 113-131.

小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学. ナカニシヤ出版.

総務省 (2017). 平成29年度版情報通信白書. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.html>.

時岡良太・佐藤映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井有香・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・岩城晶子・神代未人・桑原知子 (2017). 高校生のLINEでのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響. パーソナリティ研究, Vol. 26, 76-88.

(受稿：2018年8月28日 受理：2018年11月9日)

付録

表3：友人関係尺度項目

自己閉鎖

- 自分の心を打ち明けて話す*
- 悩み事を相談する*
- 本当の気持ちは話さない
- お互いのプライバシーに立ち入らない
- 落ち込んだ時話を聞いてもらう*
- 相手の言うことに口をはさまない
- あたりさわりのない会話ですませる
- 友だちにグチを言わないようにする
- 浅いつきあいとどめる
- 友だちの内面に土足で踏み込まないようにする
- 自分が落ち込んだ姿を友だちに見せない
- 必要に応じて友だちを頼りにする*
- 自分の内面に踏み込まれないように気をつける
- まじめな話題になると冗談でごまかす
- 相手に甘えすぎない
- 相手の世界に口出ししない

傷つけられることの回避

- 友だちからどう見られているか気にする
- 友だちから「つまらない人」と思われたいよう気をつける
- 友だちからバカにされないように気をつける
- 仲間の前で恥をかかないように気をつける
- 友だちから傷つけられないようにふるまう
- 友だちをがっかりさせないよう気をつける
- 友だちと意見が対立しないよう気をつける

傷つけることの回避

- 友だちを傷つけないようにする
- 相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける
- 友だちに心配かけないように気をつける
- 友だちから無神経な人間だと思われたいよう気をつける
- 相手の気持ちに気をつかう
- お互いの約束をやぶらない
- 相手にやさしくするよう心がける
- 友だちの心の支えになろうとする

快活的關係

- 冗談を言って相手を笑わせる
- ウケるようなことをする
- 楽しい雰囲気になるようふるまう
- 友だちの前ではしゃぐ
- 面白い話をする
- 友だちと一緒に騒ぐ

注：* 逆転項目。